

先人達の遙かな時の流れを残す、歴史街道の街。

松崎宿

松崎の地名は、有馬豊範が御原郡19ヵ村1万石の分知を受け、寛文12年(1672)頃に郡内の「鶴崎」の地に居城を築き(現在の県立三井高校)、名を「松崎」と改めたことに由来します。

松崎藩の設置に伴って、北は山家宿、南は府中宿にいたる街道筋が天下道(参勤交代道)と定められて、城下町である松崎の地が宿場町として整備されていきました。

慶応2年(1866)の古文書によれば、松崎宿の総戸数は129軒で、旅籠が26軒、煮売家が6軒あったと言われています。

旅籠油屋内部(市指定有形文化財)

旅籠油屋は江戸時代後期(19世紀中頃)に建てられた大型の旅籠建築で、棟を分けた「主屋」と「座敷」から成る。油屋には西郷隆盛が宿泊したという伝承が残されているほか、西南戦争(1877)の際には、有栖川宮熾仁親王を総監とする征討軍の休憩場所として使用され、明治9年には乃木希典が昼食・休憩をとったことがその日記から明らかである。



江戸時代の看板
(喜平は油屋の亭主)

筑前・筑後国境石

小郡市乙隈と筑紫野市馬市との境に2本の大きな石柱が建っており、左側は「従是南筑後國」、右側は「従是北筑前領」と庚太の文字が彫られています。

これは久留米・福岡の両藩が互いに国境を示すために建てたもので、以前は「従是南筑後領」(久留米藩)、「従是北筑前領」(福岡藩)という30センチ角、高さ約2メートルの石を建てていました。ところが、最初に福岡藩が基壇を持つ大型の国境石へと建て替えたため、これに負けじと久留米藩も現在の立派な国境石に建て替えたと言われています。

現存する2つの国境石は、後に建てられた筑後側がやや高い。江戸時代の薩摩街道は参勤交代道であり、ここを通ずる九州の諸大名に対する久留米・福岡両藩のメントをかけた暗黙の戦いがあったのかかもしれません。



江戸時代から幕末にかけて数多くの著名人が行き來した「街道の街」
現在も町並みは、それほど変わってはいません。
大名が通った参勤交代の道を散策してみよう。



油屋復元(イメージ)



靈鷲寺(りょうじゅうじ)

松崎藩の有馬豊範が延宝8年(1680)に三潴郡西牟田からこの地に移したのが始まり。勅願寺で格式が高く、参勤交代の大名も駕籠や馬から下り、礼拝して通過したといいます。

松崎宿
マップ



北構口(市指定史跡)

構口とは、宿場の入口に設けられた石垣と土塁のこと。南構口も合わせて4つの石垣が残るのは、全国的にも非常に貴重な例。

【松崎宿の見学等に関するお問い合わせは】

NPO法人小都市の歴史を守る会 TEL 0942-80-1920

※松崎宿歴史資料館は常時開いておりませんので、事前に連絡をお願いします。なお、旅籠油屋も同時に見学できます。